

A-5植物の風景

043. ヤシのある風景

インドネシア文化を構成する4つの植物は、ヤシ、稲、竹、バナナである。このうち最も目につきやすいがヤシの木である。絵でも写真でもヤシの木があれば一目で熱帯であることが分かる。まさにヤシの木は熱帯インドネシアの風景に不可欠な舞台装置である。

『名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ……』の歌は渥美半島に流れ着いた椰子(ココナツヤシ・略してココヤシ)の実の話を民俗学者の柳田国男から聞いた島崎藤村が作詞したものである。このように日本の海岸にも南の島からヤシの実が流れ着く。

しかし日本へ流れついたヤシは不運である。何故なら普通であればヤシは海に運ばれて流れ着いたどんな条件の悪い所でも芽を出して育つほど生命力は強い。塩水をも好む。ただし 27 度以上の気温と湿分がなければならぬので、せつかく辿り着いても日本の気温ではココヤシは育たない。

ヤシの木の代表であるココヤシは地球上の熱帯、亜熱帯地方のどこにでも古くからあるので、その原産地は分らないが、太平洋起源説が有力である。昔からインドネシアにヤシはあったが、ヤシの木があらゆる空き地に植えられて熱帯の風景として定着したのは20世紀に入ってからである。

熱帯にヤシの木が植えられたのは有用だからである。乾燥した実は 65-68%の油脂分を含むため植民地時代に食品工業用の油脂採取のため植えられ、ココヤシのプランテーション(→505)もあった。工業用としてはアブラヤシ(→562)に置き換わったが、現在では住民の自家消費のための屋敷林の代表的樹木である。自家消費分を上回るココヤシは仲買人が集貨にまわってくるので換金作物でもある。

ヤシは実は食用以外にも有用な植物である。木は住宅の建材になり、葉は屋根ふきの材料になる。実を包む繊維はタワシ、縄、マットに使われたが、今ではビニールやプラスチックに置き替っている。

外皮を向くと核皮が現われる。核皮は硬く^{のこぎり}鋸でも切れない。お椀や杓などの台所用具になる。どういうわけか活性炭の原料としてはヤシの殻に限るそうである。活性炭の吸着性を利用して排水処理の環境対策に使われている。

実の大きさは人の頭くらいであり、約 4kg の重さがある。従って高い所からの落ちる実に当たれば命も危ない。ヤシの樹の側で寝ていた人の話によると地響きで飛び起きたそうである。実でなくて葉が落ちて自動車ボンネットが変形するほどである。

しかし落下するヤシの実に当たって死んだ人はあまりいない。何故なら普通は実が自然に落ちるのは温度の冷える朝方なので、ヤシの樹の下の日中の“昼寝”で落下被害を受けることは少ないらしい。

044. ココヤシ/生命の樹

インドネシアではどの農家でも家の周りの屋敷林の自家菜園地にはココヤシを植える。植えつけは簡単で、茎をさして3年たつと実を付け始め、高さは 25m まで伸びると成長は止まる。以後 30 年間程は一本のヤシの木に年に 60 から 70 個の実がなる。ココヤシはココナツヤシの言い習わしである。

何れにせよココヤシは環境を選ばずたくましく生きていく。世話をしなくても勝手に大きくなり、年々実をつ

けることからヤシは多産の象徴である。ジャワでは妊娠7ヶ月目にココヤシの実に赤ん坊の顔を描き、妊婦はその実の汁で身体を拭く風習がある。

子供が生まれると3個のヤシを植える所がある。生涯にわたって最小限の食べ物これで保証される。ヤシの木の7本もあれば寝て食っていけるとのことである。産児制限政策普及のため家族計画協力夫婦にココヤシの苗を贈る。

ココヤシをよく見ると核皮の小さな三つの穴は芽の出る所である。2個は退化した発芽孔が目で、丸い孔が口で猿の顔に見える。ココナツヤシのココはポルトガル語の「猿」の意味である。ちなみにココヤシのインドネシア語は「クラパ(kelapa)」である。先祖に似ているとしてヤシを食べない部族もいる。

実を割って核を取り出す。その核の中の胚乳^{はいにゅう}を乾燥させたものをコプラという。未熟なヤシの核の中の果水は飲料ジュースとなる。町角で見かける屋台では頂部を切り落としストローで飲ませる。衛生面で安心できる飲料水である。

熟して半熟になるとジュース分は少ないが、その分だけ周りに果実がついている。スプーンで削って食べる。少し生臭いが整腸作用に効き目あるらしい。最近では日本の夏祭の夜店の風物詩になっている。

ヤシの樹液を発酵させるとヤシ酒(→837)になる。サトウヤシの場合は樹液を煮詰めると砂糖が採取できる。コプラを水に溶かしたココナツ・ミルクはインドネシア料理レシピの定番の材料である。日本でもケーキの材料売りに乾燥したものがある。ヤシ油の揚げ物もインドネシア料理に不可欠である。

ココナツヤシが完熟して落ちる前に実をとるには、

- 人が木に登る(特殊技能に属する)
- 樹に梯子かける(実まで届く梯子はないので他の手段との組み合わせが必要)
- 樹に切り目の段をつけ登りやすくする(樹を傷めるのが難点)
- 猿を訓練して実をひねって落とさせる(→070)、
- 竿につけた鎌で切り落とす(実まで届く竿はないので他の手段との組み合わせが必要)

高い所に実がなるのが椰子の難点であったが、最近は品種改良で背を低くして登らなくても届くものも出来たらしい。⇒771.ココナツ・ミルク

045. ヤシいろいろ

ココナツヤシ以外にも多くのヤシ科の植物がある。ピナン(pinang)といわれるヤシは20mの高さであり細身で幹に横縞がある。別名の檳榔樹(ピンロウジュ)という漢語にはなにがしの観賞用の意味があるだろう。

ピナンの実はキンマ(→833)と共に口の中で噛めばさわやかになる。かつては嗜好品としてインドネシア人に愛好されていたが、現在ではその風習は廃れている。

往時の社会的習慣からピナンの実は結婚儀礼の品になっている。インドネシア語の「結婚申込する meminang」の語源は「pinang(ピナン)」である。その意味するところは結婚申込の際には男側の使者はピナンとキンマの一式を持参する。

女性側がそのピナンを受取り、口に入れて噛めば承諾ということである。ピナンの実は割るとピーナツのように左右対称である。このことから似合いの夫婦を「ピナンの実を割ったような」と形容する。

パルメラヤシは別名ロンタル(Lontar)ヤシ、砂糖ヤシと同様に花序^{かじよ}を切って樹液をとり、煮詰めると糖分を12%含む砂糖(→778)になる。扇ヤシともいわれるように大きな葉の用途に特色がある。

葉幅の広いロンタルヤシはやバリでは神様への供え物の装飾として切り紙細工のようにヤシの葉を切り取り、ペンジョール(→930)につける。外国人にすれば立派な民芸品であるが、バリ島では農婦の日常行為である。

レンバタ島(→219)で鯨を追いかけるのに帆船が使用されているが、船の帆はロンタルヤシの葉である。ロンタルヤシが東インドネシアに目立つのは乾燥に強いからである。

ロンタルヤシの用途で特記すべきことは書物になることである。インドネシアでは紙が普及する以前、ロンタルヤシの乾燥させた葉に文字を鉄筆で刻みこんだ。刻まれた傷に炭を摺り込む。その葉を長方形に整えて紐で綴りあわせたものがロンタルといわれる冊子である。紙と比べると読みにくく、保存性が悪いのはやむをえない。



貝葉の実

ロンタル本は日本語で“貝葉(ばいよう)”という。法隆寺由来の貝葉が東京国立博物館にあるらしい。ロンタル本は日本の古書店の発行する目録に時々登場して結構な値段がついている。読める人はいないだろうから希覯本^{きこうほん}としての価値らしい。ジャワやバリの古代文学や記録はロンタル本によって傳承されてきた。バリ島のブレレン(→183)にロンタル博物館がある。

油ヤシあるいはパームヤシ(→562)ともいわれるヤシは今日の代表的なプランテーション作物である。さご椰子(→770)は幹から澱粉を採取できることから東インドネシアでは主食にする。インドネシア語でラタンといわれる籐(→558)はつる性であるが、ヤシ科の植物である。ニッパヤシ²は屋根ふき材(→807)である。棕櫚^{しゅろ}は日本でも自生可能なヤシ科である。観賞用観音竹が日本で流行ったことがある。

046. 水田の風景

インドネシア人は米食民族である。焼畑による陸稻^{おかぼ}(→882)もあるが、灌漑技術の発展によりインドネシア各地で水田耕作が行われるようになった。特にジャワ農村では水田耕作の伝統がある。ジャワ島の水田の光景は日本の農村と同じであるが、全般に緑が濃く、かなたの背景のヤシの木が熱帯であることの証明である。

二期作が通常であるから隣り合う田で稲の成長度合い異なる。田植えの隣で稲刈りをしている風景が恒常的に生じる。苗代を作り田に苗を等間隔に植え替える正条植えは第二次世界大戦中に日本の農民兵士が教えて普及したともいわれる。

収穫期には大勢の女性が押しかけて稲の穂先だけをアニアニ(→592)という道具で摘み取り収穫を分け合う伝統的やり方がまだ生きている。

牛の引く木製の犁^{すき}、足ふみ脱穀機など日本で数十年前まで使われていた。日本では民具博物館行きになりそうな耕作用具がインドネシアでは現役である。

¹ロンタルに記されるのはカウィ(ジャワ)文字である。カウィ文字は葉に刻むに都合のよいように改良された曲線の多い文字らしい。

²ニッパヤシはマングローブに生息する。幹はなく10mにも達する巨大な葉が地表から直に茂っている。屋根材になるほか樹液からヤシ酒が採取され、果実は食用になる。

田の片隅には小さな^{ほこら}祠があり、豊かな実りを期待して稲の女神デウィ・スリ(→698)が祀られている。バリ島では田の祠にも毎日お供えが具えられる。

稲作の特徴は水が必要であることである。田を耕すだけでなく、水を引き込まねばならない。太古の稲作は天水だけに頼っていたが、涌水や谷川の小規模の灌漑が行われるようになり、さらに灌漑の規模が拡大してきた。

灌漑は個々の農家が個別にやるより集中してやる方が効率的である。水田耕作は集団的社会にならざるをえず、そこから稲作共同社会が形成される。インドネシアが日本と同じ稲作に基づく社会基盤であることはF-3章(稲作共同社会)を立てて詳述する。

水田は次第に谷あいから平野へ広がったが、ジャワで近代土木技術による大規模な灌漑が行われるようになったのは植民地時代である。植民地政庁が力を入れた砂糖黍(→778)は特定期間に水を必要とすることから砂糖増産のために建設した灌漑施設が結果として稲作にも有効であった。灌漑網の普及は土木事業の得意なオランダのそれなりに評価される植民地行政の成果である。

ジャワ島やバリ島では火山の裾野は緩やかな勾配になりそこに水田が拓かれる。田に水をあまねく行き渡らせ、下の田に水を落とす、何段にも積み重ねたものが^{たなだ}棚田である。棚田の精巧な土木技術は大地に施した芸術ともいえる。

バリ島観光ツアーでは棚田を一望する所で観光バスが停まる。欧米の観光客は人間が大地にほどこした造形に驚嘆の声をあげる。棚田なら日本にもあり、日本人には珍しくも可笑しくもない。あえて相違を探すならば日本の棚田とは緑の厚さが異なる。

能登半島の先端、信州^{さらしな}更科の“田毎の月”のように日本の棚田には何か貧のイメージがつきまとう。インドネシアの棚田は溢れるばかりの緑であり、豊穡な大地のデモンストレーションのようである。

⇒590.灌漑の風景、758.主食としての米

047. 熱帯果実の香り

熱帯には数多くの種類の果実があり、その種類は温帯の3倍にもなる。そもそも熱帯の植物は多様多種である上に東南アジア原産のみならずインド、アフリカ、アメリカ大陸からの移入されたものも多い。

乾季、雨季で果物の時季が異なるものもあるが、年中、豊富な果物があふれている。熱帯地方でも高地は涼しくそこではリンゴ、ミカンという温帯果実も栽培される。

インドネシアの果物店にはありとあらゆる果実が店先を飾る。果物店もいろいろある。都心の店では磨かれた果実が積み上げてある。プンチャツク峠(→112)のようなリゾート地からの帰りの自動車道路沿いには小奇麗な店で自動車をとめて果物をトランクに積んで行くのは金持ちである。露天の果物店では商品は道端の籠に容れて無造作に放り出してある。自転車に数個のドリアンを積んでいるだけというものもある。

インドネシア語の「果実(buah)」と「手(tangan)」の組み合わせはブア・タンガンで「手土産」という意味の熟語になる。日本の「菓子折り」に対応するのが果物である。ちなみにランクが上の「鯛」に相当する手土産が生きたままの鶏である。

バリ島では果物は神に捧げるお供えである。色々な果物を組み合わせ塔のように積み上げたガボガン(→931)というお供えを頭上に運ぶ。バリで日常的なお供えも観光客が見れば芸術品である。

熱帯果物を温帯に輸出するための問題は保存性である。バナナ、パイナップルは採取してから熟れる性質を品種改良して輸出向け規格品が大量生産されるようになった。その際には味が犠牲になる。

悪臭で有名なドリアンも日本の百貨店のフルーツ・コーナーではそれほど臭わない。これも品種改良の成果らしい。輸出された熱帯果実は百貨店の一角で芳醇な熱帯の香りを漂わせても熱帯での本物に比べると新鮮さは及ぶべくもない。バナナやパイナップルのありふれた果物でも現地で食べるとそのおいしさにびっくりする。

もっともインドネシアには果物のプランテーション(→505)はほとんどない。別にそのような面倒なものを作らなくてもゴム(→561)やあぶらヤシ(→562)のように他に有利な熱帯植物の商品作物があったからであろう。

日本の女性の例からインドネシアでも女性は果物好きかと思うが、インドネシアの女性は果物を食べることには非常に慎重である。その理由は果物の汁は体内の液を増すと信じられている。授乳中の女性は乳分の成分が薄くなるからという。

しかし子供のいない若い女性までが特に午後からは水気の多い果物や胡瓜もひかえる。下半身の然るべき所の水分が多くなることはプロの女性であるという偏見がある。熱帯ではほてった体よりは爬虫類のような冷やかな感触が好まれるらしい。

⇒776.食後のデザート、777.ランブータン

048. 生活の中のバナナ

インドネシア語でバナナは「ピサン(pisang)」である。バナナの出産地は東南アジアであるが、古くから熱帯の民族の食料として広範囲に普及していた。ヨーロッパ人が初めてバナナに接したのがアフリカであったため、アフリカ語源のバナナが世界語となった。

熱帯では庭先で勝手に大きくなる。バナナは4mの高さにもなるが樹木ではない。多年草であり芭蕉科の一種である。従ってバナナの“樹”とはいわない。バナナの栽培が北緯・南緯30℃以内であるのは気温もさることながら、台風のような強風に耐え切れないからである。

食料として有用であるということ以外にバナナは生活の中に解けこんだ必需品である。大きな葉は傘の代りになる。スクールで子供がバナナの葉を頭にかざしても濡れるのは避けられないが、雨が直接あたる息苦しさは逃れられる。

雷雨避くバナナの広葉に駆け込みて 北端辰昭著「珊瑚礁」

バナナの葉は適当な大きさに切ってあらゆるものの包装にも使われる。「ナシ・ブングス(nasi bungkus)」はバナナの葉で包んだ弁当である。かつて日本で竹の皮が使われていた要領である。バナナを商品として輸送する際にはバナナの葉でラップする。売り物のバナナの下敷きもバナナの葉である。葉や茎はパルプ原料にもなる。フィリピンではバナナの繊維から作られたアバカという布³がある。

まだ開いていないバナナの青々とした葉は見た目も清潔で気持ちが良い。葉にしっとりと水分を含んでいるので食料の保冷保存に合理的である。発熱するとバナナの葉を開いて肌に当てるといった解熱剤の用途もある。

³アパカは手漉き紙の透き通るような感じの布であり、民芸用品のランプなどがある。

る。生花や根、焼いた灰も多様な用途の薬になる。

蒸し焼きのためのアルミホイルのようにも使われるし、出来上がった食事の皿代りにもなる。豚がおれば食事の後始末は皿ごと処理してくれる。イスラム教徒の所では豚がいなくてもバナナの葉は土に帰る。

最近では買物の包装に新聞紙が用いられ、ワルン(→858)の食品もバナナの葉に代わりビニールなどが使われるようになった。近代文明のもたらした腐らない製品が多くなるにしたがって町は醜く汚くなった。

影絵芝居のワヤン人形を並べる台は新鮮なバナナの幹と決まっている。ワヤンの上演(→905)に先立ってバナナの幹を探す。丸太のように見えてもそもそも草であるから切り倒すとしずくが^{しな}滴る柔らかな幹は人形を突刺しておくのに都合がよい。

バナナの幹は人形の置場所として便利というだけのものではない。ワヤンにおけるバナナは豊穰なる大地の象徴である。バナナはインドネシアの文化基盤に根ざす植物である。ワヤンの上演に先だってダラン(→874)はバナナの聖にも祈願する。王宮でのスラムタン(→705)の食物はピサン・ラジャというバナナが配られる。
⇒772.バナナの調理

049. ドリアンの臭い

東南アジアに出かけて帰ってこない華僑に対して故郷では「榴蓮にとりつかれる」という。『榴蓮』とは中国語で居続けるという意味の「留連」と同音である。留連とは出稼ぎに行ったまま出身地へ帰らない華僑のことである。

『榴蓮』の意味は果物の「ドリアン(durian)」である。南方の果物のドリアンに取り付かれて中国へ帰らない華僑というのはドリアンの魔力を知る人には言いえて妙である。ちなみに“ビッグ・ドリアン”とは西洋人がつけたジャカルタのニックネームである。

ドリアンはヤシよりも少し高いパンヤ科の常緑の高木である。30m をこえることもある。ラグビーボールよりやや小さく殻は大きなトゲで包まれているのでナタで割って実を取り出して食べる。インドネシア語のドリ(duri)はトゲの意味である。

おいしいドリアンは自然に熟するのを待たなければならない。完熟すると木から落ちる。落ちるのは気温の冷えた朝である。そこでドリアンの木の所有者は時期になるとドリアン泥棒に備えて樹の傍に仮設小屋を作り、夜中に見張り番をする。

ドリアンの落ちる音で駆けつける。中にはドリアン泥棒が石を放り投げてドリアンの落ちる音に見せ掛ける。見張り番が小屋から駆けだしたその留守に小屋の中のドリアンが失敬されるということもある。

肉食獣の虎(→067)も好む果物がドリアンである。シーズンになると寝ずの番をしていた人が実の落ちる音で駆け寄るとどこからか虎も同時に現われた。ドリアン好き仲間の^{おきて}掟では早く駆け寄った方に食べる権利があるのが鉄則である。

虎もこの“先着優先”はきちんと守るということだ。同時であればどうなるか、その場合はジャンケンである。仮に人と虎の両者が同時であった場合は虎も参加してジャンケンで決める。

しかし虎が人とジャンケンすれば必ず負ける。何故なら虎はいくら考えても何時も「パー」であるから人は

「チョキ」を出せばよい。この小話のミソはジャンケン⁴のパーである。インドネシアにもジャンケン⁴はあるが、そのやり方は親指・人指し指・小指の何れかを出す。この結果は次のような組み合わせで勝ち負けが決まる。親指(象) > 人指し指(人)、人指し指(人) > 小指(蟻)、小指(蟻) > 親指(象)である。

蟻 > 象は奇異な感がするが、熱帯の蟻⁵は 1cm くらい大きさがあり、色は茶色がかかっており顔つきも狂暴である。これに噛まれると猛烈に痛いそうである。蟻が象の耳や鼻の中に入って柔らかい所を噛み付けば、象が涙をだして逃げまわるといふ。蟻が象に勝つのはムベなるかなである。

何れにせよインドネシアのジャンケンにパーはない。ジャンケンのパーは日本の慣習である。東南アジアの人のドリアン話はつきない。ドリアンをめぐる小話は次々に作られる。虎のジャンケン日本人も参加しているという例であろう。

⇒773.ドリアン/果物の王様

050. ブリンギン/聖樹

ベンガル菩提樹^{ほだいじゅ}という樹は英語のバニアン(banyan)が一般的であるが、インドネシアでは「ブリンギン(beringin)」、またの名は「ワリンギン(waringin)」である。榕樹^{ようじゅ}という日本語もあるが、日本で一般に言われている菩提樹とは全く別種類のクワ科⁶の熱帯植物である。インド菩提樹とも異なる。何れにせよ温帯では馴染みのない樹であるが、沖縄ではガジュマルとして同種が生息している。

ブリンギンは大きくなると高さ 30m にもなるが、この樹はもともと宿木である。鳥が運んだ種が大きな樹の股のような所で発芽する。成長は早く宿主の樹を超えて葉を茂らせる。その枝からモヤモヤと“気根”^{きこん}が垂れ下がり、やがて土に接する。土に接した気根は成長して幹になる。このようにして菩提樹は幹・枝・根が判然としないままに絡みあって広がっていく。カルカッタの植物園の樹齢200年物の木の広がりには 342m、気根の数は 1380 にも達するという。



アンコールトム
2016/10/02

たまたま石仏^{ほこら}の上や祠の側にこの樹があると上から気根が垂れ下がり、長い年月の間に石仏や祠が樹の中に埋め込まれてしまう。アンコールワットの写真で見かける光景である。宿主の樹を取り囲み、宿主の樹勢は衰えて死滅した箇所が空洞になることから“絞め殺しの木”といわれるものと同類である。

温帯育ちの人間にはこの樹から漂う植物の生命力の妖気は不気味でさえある。インドネシアの幽霊はブリンギンの樹の下に現れる。日本の幽霊は柳の樹の下に現れる。両者の共通点は葉または気根が上から垂れ下がることである。

ブリンギンが東南アジア各地でも“聖樹”として崇められているのはインド文化の影響である。ジャワではワ

⁴インドネシアの「じゃんけん」インドネシアには、二種類の「じゃんけん」がある。一つは、三人以上でする「じゃんけん」はホンピンパ(Hompinpa)という。「♪ホンピンパ・アライム・ガンブレン……ロンベン(Hompinpaaliumgambrengmaijahpakebajuronbeng)」と歌いながら、手のひらを8の字を横に書くように、裏表させながら腕を動かす。そうして、手の平(一般に色の白いほう)か、手の甲(一般に色の黒いほう)を見せ合う。そして、手の平か甲か、数が多いほう、あるいは少ない方が勝ちとなる。もう一つは、二人でやる「じゃんけん」で「スイー(Suit)」、あるいは「スイー・チョン・グレイン(Suitjenggreng)」という。出所⇒

http://www.geocities.jp/indah6148/jakarta/jakarta_11.html

⁵インドネシアの蟻はあらゆるところに出没する。パソコンの中にも入り込みトラブルの原因になる。

⁶バニヤン、カジュマル、ブリンギンは気根があることが共通しているが、分類学的にはクワ科に属するが別属とする解説もある。

リンギンは政治的領域の中心のシンボルである。御所の^{しんてん}紫宸殿の前の“右近の桜・左近の橘”のようにジョグジャカルタでもスラカルタでも王宮前のアルンアルン(→122)という広場にはブリンギンの樹がある。マタラム王家がカルタスラからスラカスタへ遷都した際の行列の先頭には絹に包まれたブリンギンがあった。

ジャワの町中の公園でブリンギンの根元に花などの供え物がある⁷。バリ島の寺院やサモシル島(→087)の王墓のような聖なる場所に植えられている。

バタック神話では全ての生物はブリンギンの枝が落ちて生まれたという。バタック人(→607)の家系図はブリンギンの葉を型どっている。

ブリンギンは聖樹としてインドネシア国章のパンチャシラ(→365)のシンボルの一つに採用されている。スハルト体制当時の政府与党のゴルカル(→393)の党章(シンボルマーク)はブリンギンであった。野党が与党に食い下がっても、与党側が「聖樹に文句があるか」と聞き直して往なされた。ちなみにインドネシアの選挙では文盲が多いという事情からか、政党のシンボルマークをチェックする方式である。従って政党がどのようなマークを使用するかは選挙の死命を制する問題である。

051. バンブーの用途

英語の「bamboo(竹)」の語源がインドネシア語の「bambu」であるように竹はアジア特産の植物である⁸。インドネシアでも民家や集落の周辺のみならず森林の中にも竹がある。竹にもいろいろの種類があり、数十メートルの高さ、直径 80cm などの巨大なものもある。

日本の竹は竹やぶに生えるが、熱帯の竹は一箇所に株になってかたまっている。従って竹ヤブのような日本画的風景はない。しかし『竹取物語』と同じ竹の中から子供が生まれた、という民話がパサイ王国(→256)の建国伝説であり、類似の話がトラジャ地方(→203)にもある。日本との共通する民話(→1000)に竹が絡んでいる。民話の背景は竹の生長エネルギーへの憧憬があろう。

東南アジアの島々を放浪した科学者のウオーレス(→080)は「竹は自然が熱帯アジアの住民に与えた最大の贈り物である」と述べている。竹のない西欧からきた人には竹の印象が鮮やかであるのは日常生活において竹の使用⁹がふんだんにあるからである。

熱帯アジアの生活に竹は不可欠である。細工がしやすいので竹細工(→936)として工芸品の材料である。例えば台所の炊事道具のほとんどは竹製である。しかし最近ではポリエチレン製が進出してきて竹の領域が犯されている。

中が空洞であるので容器になるが、竹そのもので炊飯も行う。パピヨン(papiong)というトラジャ独特の竹筒料理は竹の筒に米や肉を入れて蒸し焼きにしたものである。竹のほのかな香りが味について美味しいそうだ。竹の子を食べるが、あまり一般的でないらしい。

竹の楽器はガムラン(→910)の笛である。アングロン(angklung)やジェゴグ(→918)という竹だけのインドネシア独自の楽器¹⁰がある。

⁷ <編者註>東南アジアのブリンギンの大木にはかならずお化けが住んでいるからである。

⁸ <編者註>竹の繁殖範囲の西端はイランだろう。イランでは竹製品が日常的に使われている。

⁹ 東南アジアの文化史で鉄の利用が少ないように思う。世界各地で鉄の利用されている用途の多くは東南アジアでは竹で代替されているからであろう。

¹⁰ ティモール島、サブ島のササンドゥーという楽器は太い竹管に弦を張ったもので、周りに取り付けられたニツパヤシの葉に反響して音色をだす。沖浦和光『竹の民俗誌』

軽くて丈夫な竹は家屋の建築材である。民家の壁は竹を編んだものである。隙間があるために風通しがよい。密閉された壁では暑くて寝られない。

トンコナン(→940)というトラジャの伝統家屋は竹の家屋でもある。ジャカルタ市内の高層ビルの建築現場の足場も竹製である。もっとも熱帯での鉄骨の足場は熱くて使いにくいという事情もある。地方では竹製の橋もあるらしい。水道管にも竹が使用される。

竹を火で熱すると大きな破裂音を発する。爆竹は景気の良い音でお祝いの添え物である。文字どおり昔は青竹製であったが、最近の爆竹は火薬の爆発音であり、日本にもクリスマスの頃に小型で音も小さいのが玩具屋に出回る。

かつては華僑の陰暦正月やイスラム教徒のレバラン(→814)の景気付けに爆竹が鳴らされたが、スハルト時代は禁止されていた。禁止の理由は危険防止ということであるが銃声と紛らわしいのが為政者としては気になったからであろう。ワヒド大統領になって解禁になった。断食月は毎晩、爆竹の音がうるさいらしい。中国系住民の正月行事(→710)も解禁になりチャイナタウンに爆竹が鳴り響いた。

バリ島では竹の破裂音がいろいろな儀礼の開始の合図となる。こちらは今の所は本物の竹が使用されているらしい。ちなみにバンブーの語源は竹の破裂音である。

052. 百花繚乱



フランボヤン(Flamboyan)は「火炎樹」といわれるように真赤な花が火炎のごとく木の全体を覆っている。フランボヤンはフランス語であるのは当時フランスの植民地であったマダガスカル島が原産地のためである。鳳凰木ほうおうぼくという立派な日本名があるが、俗名“火炎樹”が一般的である。

四季のない熱帯でもこの花は咲く時期が決まっており、雨季の始めである。花が炎のように見えることからの命名である。樹に群生した蔓珠沙華まんじゅしゃげである。

火炎樹の花が咲くと暑さも頂点に達し、やがてスクールが訪れる。インドネシア駐在員の俳句の同好会で火炎樹の句が多いのはインドネシアの数少ない季語だからである。

火炎樹の木下闇には恋がある 北端辰昭著「珊瑚礁」より

インドネシアが花に溢れているのは熱帯であるから当然のことであるが、オランダ人の置き土産もある。花好きで知られるオランダ人は世界各地からの花を持ち込んだ。温帯の花もバンドウン(→107)やマラン(→148)の高原ならば移植可能であった。冬のない一年中花の咲く土地での余生はオランダ人の憧れであった。

インドネシアの邸宅ではガーデニングが板についているのはオランダの置き土産らしい。庶民の家でも芭蕉、ブーゲンビリア、ハイビスカスが咲き乱れている。その他にも色々な花があるので、インドネシア人に名を聞いても「ブング(bunga=花)」という返事しか返ってこない。日本人は花の名前に執着しすぎかもしれない。

熱帯では一年中、花が溢れているから次のような小話がある。日本の蜜蜂は花がある時にミツの収集に励

み、花がなくなると活動を止める。そこでこの日本の蜜蜂をいつも花のある熱帯に連れていくと、当初は思惑通り蜜蜂は一年中熱心に働きミツの収集量は増え大成功であった。

しかし、そのうち年中いつも花があるからミツを貯める必要がないことに気がついた蜜蜂は働くことを止めたという。あまり出来すぎた話なので真偽のほどは怪しいが、働き過ぎといわれる日本人には身につまされる話である。

ホテルの部屋に花があるのでよく見ると造花である。自然の花が多すぎると偽物の造花の方が価値あるらしい。果物も生鮮なものより缶詰やビン詰の方が有りがたられるのと同じである。

何かの催しには花文字の看板が立てられ花は無造作に使われるが、蘭の花だけは手間暇かけて育て花屋で売られる商品であり、花束や花輪にして大事に使われている。

インドネシアでは花以外には価値がないので葉は惜しげもなく捨てられる。供花は花だけをほぐす。日本人の葉も含めた花全体を愛でる活花いけぼなの美意識は花が相対的に少ないからであろうか。

053. 三つの国花

花の多すぎるインドネシアであるが、国花として指定されているのはメラティ(melati)、月下美人、ラフレシアの3花である。

インドネシア語のメラティよりはジャスミン(jasmine)の名で世界に知られる。インドネシア人の好きな花は見ても美しい花よりも香りのよい花である。

食卓の水鉢にジャスミンの花びらを浮かせると料理も引き立つ。花屋でジャスミンの花びらが落ちて残る。花屋はその屑花を貯めておく。花を買えない貧乏人が屑花を安い値段で買って帰り、ベッドに花を敷いて香りを楽しむ¹¹。

香りによい花はチェンパカ(cempaka)とプルメリア(plumeria)がある。バリ島で神への供え物を運ぶバリ島の女性は髪飾りにプルメリア(ブンガカンボジアともいう)を付けている。単なるアクセサリーではなく儀式の正装で、女性の清純さを意味する白または黄色の清楚な花である。プルメリアは南米が原産地であるが、インドネシアでは聖なる花になっている。ジャワの墓地にはプルメリアが咲いている。バリ島では家のほこら祠を覆うように咲く¹²。

月下美人¹³は蘭と混同されているがサボテン科である。年に一度だけ真夜中に開花し夜明けにしぼむ。従って月下美人の花を実際に見た人は少ない。それ故に神秘性が伴う。松本亮先生(→364)によれば「底しれぬ透明な体腔にのみこまれんばかりの不気味さを秘めている」という難解な美しさである。

スフナン王家(→131)の即位に不可欠な聖なる花である。しかもチラチャップ沖のカムバンガン島(→124)に咲くものでなければならない。月下美人の花はワヤンのクレスノ(→946)の持ち物で死期に至らず倒れた者をよみがえ甦らす神秘の力を持つ。

¹¹ホテルの格付けでジャスミン(メラティ)クラスは中位のホテルである。インドネシア人を対象にした高級ホテルということであろうか。

¹²<編者註>カンボジアではプルメリアはどこにでも植わっている。

¹³月下美人のインドネシア語は「月の蘭(anggrekbulan)」である。花の開花の観察や花にからむ伝説は松本亮先生の『ジャワ夢幻日記』にくわしい。

ラフレシア(rafflesia)はスマトラのブングル州(→099)のジャングルの中でラッフルズ(→338)が発見した世界最大の花である。1990年の大阪の花と緑の万博に出展されて以来、一躍、有名になった。2000年の淡路島の花博でも人気があった。

ラフレシアの命名は当時の英国の副総督である発見者のラッフルズにちなんでいる。正式の名はラフレシア・アーノルディと言い、実際の発見者であり命名者であるアーノルド(Arnold)博士の名もあるが、ラフレシアと略されて慣用されている。スマトラ島以外にカリマンタン島のジャングルでも見られる。

大きさは直径1.5m、重量5~8kgにもなる。ギシギシと音をたてながら2カ月ほどかかって開花する。咲いてから数日で腐敗するので日本での展示は樹脂で固めたものである。

植物の根に菌糸を差込め樹皮から花だけが成長するという植物で、葉や茎はない寄生植物である。開花すれば悪臭¹⁴を放つ。外資に寄生するインドネシア経済をラフレシアになぞらえた書¹⁵には思わずにんまりとした。ラフレシアとは徒花^{あだばな}のお化けと言ったところだろうか。

054. 天恵の熱帯雨林

ジャングルに降る雨は何層もの葉で受け止められ、地表に落ちる雨は10%程度といわれる。ジャングルは“スポンジ”といわれるのは水分の吸収能力である。ジャングルにダムを築くプロジェクトがある。多くは水力発電の目的であるが、単に水を貯めるだけならジャングルをそのまま保全することである。ジャングルは“緑のダム”である。

熱帯雨林は天恵の資源であったが、その実態はあまり知られていなかった。近年になって熱帯雨林の重要性から研究が進められるようになった。根元を這いずり回る方法での研究は限界があり、樹冠部¹⁶こそ樹木の生命の宿るところで観察を行いたい。しかしどうしてジャングルの中で地上70mの樹冠部に達するかの方法が問題である。

そこでアメリカは巨大クレーンを持ち込んだ、フランスは飛行船で樹冠の上に軟着陸した。これに対して日本(京大大学生態学研究センター)がマレーシアで採用した方法は樹の傍らに樹冠に達する櫓^{やぐら}を組むものである。もちろんエレベーターはないから20階建てのビルの高さを危なげな階段で登り降りするわけである。

熱帯雨林の新しい評価は植物・動物ともに生物の種類が多いことである。地球上の生物種の141万種のうち熱帯雨林にその半分がある。特に種の多さでは昆虫と被子植物が圧倒的である。

エイズ・ウイルスはアフリカのジャングルに潜んでいたウイルスが“パンドラの箱”から開け放たれたものである。必ずしも全てが有用な生物ばかりではないが、遺伝子工学の発展により多種の生物の存在自体が“遺伝子資源”と考えられようになった。国際協調のため生物多様性条約が結ばれているが、水面下では21世紀の遺伝子産業をめぐる鏝^{つば}ぜり合いが始まっている。

¹⁴悪臭でラフレシアを上回るのがブンガバンケイ(bungabangkai)である。コンニャク科に属し高さ5mに達し、球根は直径1mというボゴール植物園(→114)の名物である。茎も葉もなく3年に一度、球根から直に真っ赤な花が咲く。写真で見ても猥褻な花であるが、その上さらに腐敗臭がただよう。その臭いで気絶する人もいるほどである。この臭いから「ブンガ・バンケイ=屍の花」という。東京の小石川植物園にもある

¹⁵中原洋「腐敗と寛容インドネシア・ビジネス」2005 東洋経済新報社

¹⁶熱帯雨林の高木は5~6年の間隔で2~3月にわたり、一斉に開花する。地上70メートル上の出来事で人が見ることができなかったものを観察した記事が「熱帯雨林の一斉開花見た」で報じられた。朝日新聞(1996/6/5 夕刊)。

かつて熱帯雨林は人の近寄りやすい所であり、20世紀初めのスマトラ島やカリマンタン島の地図は海岸線だけで中は真っ白のままに残されていた。当時の人は恐る恐る密林に入って獣皮、樹脂、香木、蜂蜜、燕の巣などを持って帰ることで満足していた。

熱帯雨林の大規模な伐採が始まったのは植民地時代である。スマトラ島のジャングルはゴム園のプランテーション(→505)のために開拓された。その後、人類の強欲はブルドーザーを尖兵にジャングルを強行突破して道を拓き、チェーンソーで大木をなぎ倒し、熱帯雨林を掃滅しようとしている。

斧による伐採の場合は4人がかりで1本/1日であったものが、チェーンソーの発明によって森林の伐採をいとも簡単にした。チェーンソーはノーベルの火薬と同じくらい悪魔の発明であるが、インターネットで調べても発明者の名前は分からない。

近年ではパームオイル(→562)の需要はプランテーションの拡大のため森林放火を組織的に行わせた。熱帯雨林の消滅に伴う地球規模の環境問題が提起されている。

⇒740.熱帯雨林の危機

055. ジャングルの法則

熱帯雨林はジャングルといわれる。日光は生い茂る樹の葉で遮られ薄暗くむせるような湿気の中は異様な雰囲気である。日のあたる林冠と林床では乾燥度が異なる。ジャングルを海に例えるなら地上は海の底にあたる。

樹幹には枝がない。先の方まで細くならない。樹高は高く先端に葉からなるカリフラワー状の樹冠がついている。木の高さからすると不つり合いなほど小さい。30m を超える高いグループとそれに続く2層からなる。なかには60m 以上にもなる高い樹もあり、高さ毎にブロックとなり生活圏を異にしている。

ジャングルでは動物のみならず、植物もまた生存競争を迫られる。倒木でジャングルの天井に穴が空くと日光をめぐめて競争が始まる。速く先に伸びたものが葉を繁らせて“天蓋”をつくり、遅れたものは日光に浴することが出来ず、死滅するのみである。“ジャングルの法則”とは弱肉強食の意味であることから動物界と誤解されがちであるが、植物界のことである。

ジャングルは植物の宝庫ではあるが、人の食料になるものが手に入られるわけではないから人類にとっては“緑の沙漠”であった。太平洋戦争中、ニューギニア島などでジャングルに追い込まれた日本兵は餓死した。

原生林では地表に日が差し込まないので地表植物はなく、案外と歩きやすいらしい。雨も樹枝が遮るので直接濡れることはない。ただし湿度は非常に高い。

熱帯林の樹木の多くは根元には“板根”を持つ。板根とは地表部分の根が地上に露出し地上で3~8枚の板が支柱のようになっている。人の背丈以上であり9mに達するものもある。

一般に熱帯の樹の根は地上部分と比べると極めて浅い。60m の高木でも根の深さは2~3m にすぎない。インドネシアには台風はないが、何かの拍子に突風が吹くと根の浅い熱帯の樹木はバタバタと倒れる。大地に根を張るという樹木のイメージは温帯のものである。

赤道直下の強烈な太陽の光、多雨による十分な水分の供給、植物の成育にこれほど恵まれた場所は地球上の他にはない。しかし問題がないわけではない、それは土壌である。

熱帯土壌は有機物の蓄積が非常に少なく貧栄養である。地表の皮層をかろうじて栄養のある土が覆って

いるにすぎない。せいぜい 30cm 程度である。

熱帯のジャングルでは栄養分が「植物から植物に引き渡される」といわれる。その意味は温帯では植物が死ぬと土に一度分解される、そしてその土の栄養分を基として次の植物が成育する。これに対して熱帯では枯れた植物から直に、土を介さずに次の植物が育つ。

地球の樹木は北方のタイガの場合是一种の樹木だけの《適者生存》の原理が貫かれるのに対して、南方のジャングルでは多種の樹木が密集しており同種の樹を探すことは大変困難なほどでいわば《多者共存》である。インドネシア国是の“多様性の中の統一(→367)”とどこかで繋がっている。

056. 香料の樹

スパイスへのヨーロッパ人の渴望がヴァスコ・ダ・ガマをしてインドへの航海を行わせた。しかしインドへ来てみると胡椒は入手したものの最上の香料はもっと東から来ることが判った。さらに東に船を進め辿り着いたのがインドネシアの島々である。

東南アジアの海域に広がる熱帯の島々は香料の島としてヨーロッパに知られた。今でも“香料(スパイス)諸島”という言葉がインドネシア群島全体の意味で使用される。しかし狭い意味の香料諸島とはモルッカ諸島(インドネシア語ではマルクが正式の呼名)のことである。そこは丁子、肉荳蔻という香料の原産地の島である。

特に丁子はテルナテ島(→228)周辺の小島にしか生息しない樹木であった。後に香料貿易の独占を図るVOC(→272)の監視の眼をかいくぐり苗が持ち出され、今日ではアフリカでも栽培されるようになったが、海風がない所では育たないという気難しい樹である。

中国語の丁子は「釘」と同音の「丁」である。丁子はインドネシア語でチェンケー(cengkeh)、英語でクローブ(clove)である。語源の「clou」はフランス語の釘に由来する。丁子は花の蕾を採取してそのまま乾燥させたものであるが、釘の形が名前の由来である。

マゼランはスペイン王室をスポンサーにして5隻の船に 230 名を乗せて 1519 年に西回り航海に出かけた。3年後戻ったのは丁子を積んだ1隻の船と 18 名である。4トン強の丁子は航海への支出を償った上でも大もうけした。

肉荳蔻はナツメグ(nutmeg)ともいわれる常緑の喬木である。ナツメグの実には芳香がある。実の周りの種皮はメース(mace)といわれ、これもまた香料として使用される。原産地はバンダ海にあるバンダ諸島(→232)である。樹皮がうすく傷つくと染みだした液が血のように見えることから中国では医療用の薬、特に強壯剤として使用された。

香料はもともと南海貿易の主要商品として中国へ輸出されていた。中国ではその香りが好まれ皇帝の前で臣下は口に香料を含んで話をした。諸々の病気に効く薬であったが、南方の香りは回春剤としても重宝された。

モルッカ⇒マラッカ⇒インド⇒アラブ⇒ベニスへと幾多の商人を経由してヨーロッパへも持ち込まれるようになった香料は食事に使用された。香料のある食事は何か優雅なものを想像するが、実際は腐肉を食べるための“苦肉の策”であった。

雪と寒さに閉じ込められるヨーロッパでは冬には家畜に与える飼料が無くなる。従って冬の前に大量の家畜を屠殺した。この保存肉にはやがて腐臭が漂ってくる。この臭い消しのため香料は生活必需品となった。事実、香料は防腐剤成分を含んでいる。

しかしながら香料の必要性が減じる事態が発生した。肉保存の冷蔵庫以前の大改革は根菜類の“蕪”の栽培である。蕪によって冬季の飼料の供給が可能となり、冬の前に大量の豚を屠殺しなくても越冬できるようになり、従って腐肉を食う必要がなくなった。この時点で世界史を動かした香料の歴史的役割は終わったといえる。

⇒026.香料島の火山、761.香辛料の使い方

057. 香木・白檀

香料と香辛料は別物である。香辛料とは唐辛子とか山葵^{わさび}など食事の味付けである。香料の本来の用途は香りである。日本でも寺院で線香が用いられてきたが、香水が化粧品として使用されるようになったのは近代以降でしかもその使用量はわずかである。

何れにせよ香料について日本人の関心がうすいのは体臭と関係があろう。マレー系民族も体臭をきらいマンドイ(→803)を好む。日本人の風呂好きも蒸し暑い気候に加えてマレー系民族が日本にもたらした風俗文化の普及であらう。

日本にも例外的に香りを楽しむ芸術として“香道”^{こうどう}という趣味道がある。いろいろな香りを焚いてその匂いをかぎ分ける平安貴族の遊びとして京都で細々と伝えられてきた。平安貴族が風呂を愛用したとは聞かないから彼らは体臭をごまかす細工に熱心であったのであろう。

さて熱帯樹林には芳香を有する香木がある。沈香^{じんこう}はジンチョウゲ科の高木の空洞や割れ目にたまる樹脂である。インド、中国、日本で焚香として重用されてきた。龍腦^{りゅうのう}は龍腦樹の心にたまる白色の油性結晶で薬品や飲用剤の貴重な香料である。

安息香^{あんそくこう}の木はスマトラ島に多い。樹皮を剥いで樹脂をとる。乾燥させるといい香りがする。日本でも沈香、白檀とともに薫香に使用する。その他の用途は化粧品、防腐剤、去痰剤、軟膏剤に混合される。イスラム教の宗教儀礼にも使用される。

インドネシア特産の香木で特記すべきは白檀^{びやくだん}である。その主産地はティモール島(→221)である。白檀は常緑高木であり40～50年経ると木材の中心部が芳香性をおびてくる。根に近い部分ほど香りが高い。インドや中国で寺院の建造物、仏像に使用された。

ヨーロッパ人がきて白檀はヨーロッパにも輸出され、白檀から水蒸気蒸留でえる白檀油が石鹸、化粧品、薫香に大量に使用されるようになった。日本の扇子にも白檀の香りがする。こうして乱獲された結果、今日では白檀の木は貴重品になった。

その貴重な白檀はバリ木彫りの素材になる。白檀に神様を彫れば芳香が立ち込めて有難味が増す。しかし値段の手ごろのものはしばらく経過すると香りが薄れるのは普通の素材に人工香料を吹き付けたものであろう。

白檀はインドネシア語で「チェンダナ(cendana)」という。固有名詞になるとスハルト大統領の私邸(→161)のある通りのことであった。

英語で白檀を「サンダルウッド(sandalwood)」という。一方、東南アジアでゴム草履^{ぞうり}と並び履物(→789)として定着しているのがサンダルである。〈白檀のサンダル〉と〈履物のサンダル〉はどんな関係にあるのかと考えた。そこで思いあたったのがエジプトのミイラである。その語源はエジプトのツタンカーメンの遺品のサンダルが白檀であることに由来するに違いないと見当をつけた。しかし結論は白檀の語源はラテン語の芳香の意味のサ

ンタル(santal)であり、白檀のサンダルと履物のサンダルは無関係という関係らしい。同じことを考えて無駄な時間を潰しそうな人のためにあえてここに記しておく。

058. 鉄木とチーク

カリマンタン島の低地に生息するクスノキ科の樹木に「ウリン(ulin)」がある。その特徴は非常に固いことで、日本では“鉄木”^{てつぼく}といわれる。インドネシア語でも「カユベシ(kayu besi=鉄の木)」といわれ比重が 1.2 と重いので水に沈む。生命力も強く丸太状の幹の下部を土に埋めると根が出る、幹からは芽が出て、樹木に成長する。

材質が固く耐久性、耐虫性にすぐれるので杭上家屋(→793)の杭に使用される。ただし上下をひっくり返しておかないと根がはえ、樹皮の下から芽が出て木になる。

ウリンは固いが縦に裂くことは容易であるので薄板にして屋根をふく。瓦やタンより丈夫である。したがって値段も高い。ただし経年で黒ずむ。カリマンタン島の河口にあるバンジャルマシン(→192)やサマリダ(→194)の町では民家の屋根が黒い。ジャワの赤黒い瓦に慣れた目にはウリンの黒屋根は印象的なカリマンタン島の風景である。

アニミズムのダヤク人(→624)は死者の遺骨を屋外のサンドウン(sandung)という木製の箱に安置する。死者の魂の安置所は永遠のシンボルであるウリンで作られる。

ウリンの使用先に胡椒^{こしょう}を這わせる支柱の用途がある。畑の中へ重い木を運びこむのは大層手間に見えるが、植えてから 10 年以上の収穫がある胡椒の支柱はウリンに限る。普通の材木ではすぐ腐るか、白蟻にやられてしまうからである。太平洋戦争中に日本は鉄の不足のためウリン製の歯車を製造したという話もある。ラワン材などの熱帯林が輸出用のため伐採されているが、ウリンは固すぎるため合板には使用できない。

日本でも“幸福の木”と言う名の観葉植物として導入されている。自然のものは可愛い赤い花が咲くらしい。

チーク材は乾季には落葉するモンスーン林の代表樹木である。幹が白樺のように白いので目立つ。自然のものは乱獲で枯渇したためジャワ島の山岳地に植林されている。ツンパン・サリ¹⁷というアグロフォレストリー(→059)の手法が用いられている。

硬いが加工はしやすく樹脂の光沢があるチークは高級家具¹⁸に使用される。水や白蟻に強い¹⁹ため建築材にもなる。木造の寺院やモスク建築にはチーク材が用いられる。

当初、ヨーロッパの国々は軍艦製造材の軍需物資としてチーク材の確保に躍起となった。20世紀以降、艦船は鉄で作られるようになっても、甲板材はチークである。耐水性に優れているためであり、鉄道枕木、電柱、坑木の用途もあった。

黒檀^{こくたん}の心材は真っ黒か褐色である。硬く耐久性のあることから楽器、額縁、高給家具に加工される。バリ木彫り(→933)の材料である。土産物売りのバリ彫刻は軽くて材料からして黒檀でないことが分かる。多分、靴

¹⁷ツンパン・サリ(Tumpang Sari)は 1856 年からジャワ島の国有地に森林再生のために導入された人口造林の方法である。主要樹木を植樹し、併せてキャサバ、パパイヤ、コーヒーなどの農作物の植付けを農民に認め、樹木とともに育てる方法である。

¹⁸マホガニーもチーク材と同様に材質が良いので高級家具になる。マホガニーの原産地は東南アジアではなくアメリカである。インドネシアでは西ジャワで造林されている。

¹⁹<編者註>昔インドネシア人になぜチーク材に虫が付かないのかと尋ねたところ、「苦いからさ」と答えてきた。「ふーん、君は虫の言葉がわかるんだあ!」と。

墨でも塗ってあるのだろう。しかし一旦手に持てば買わねばならないはめに陥る。

スラウェシ島から日本へ黒檀が搬出されているらしい。位牌^{いはい}になるらしいが、近年では現地で製品加工されているとのことである。

059. 屋敷林

ボロブドゥール遺跡の上から周りを見渡すと一面にヤシの木が広がっている。よく見れば木立の隙間から住居らしき赤黒い屋根が散見される。農家はプカランガン(pekarangan)という屋敷林²⁰に取り囲まれており、集合すると森にしか見えない。ジャワの農家は屋敷林の木立にすっぽりと囲まれており、高速自動車道路からだど人家があることを見落とすほどである。

ジャワ農村の景観を特徴づけている屋敷林は日陰を作り居住環境をよくする。木立は有用な栽培植物であるココヤシにドリアン、マンゴなどの果物の樹である。最も多いココヤシは一戸あたり20本以上というのが相場である。

ココヤシの若い果実は果汁として、完熟した実からはヤシ油、胚乳^{はいにゅう}はココナツミルク(→771)になる。ココヤシや果実は自家消費を上回る余分のは買いに来る業者に売る。プカランガンの収穫品の一部は商品にして流通にのせられる。

屋敷林の一面に竹藪は欠かせない。竹は籠^{かご}やザルの材料である。家の壁などの建材でもある。繁殖による拡大を抑止するため、竹藪の周囲には溝を掘ってある。

木立の隙間には草本のバナナ、パパイヤなどの果実が植えられる。バナナの葉は刻めば飼料にもなる。そのまた隙間には野菜、香辛料などが植えられる。トウガラシ、胡椒^{こしょう}などの日常の香辛料に加えて薬用植物もあり、庭は薬箱代わりでもある。役にたたない花は鑑賞用という役にたつ。

鶏が放し飼いされている。山羊^{やぎ}がいることもある。生垣の葉は家禽の餌になるものが植えられている。池もあるが、風流を楽しむものでなく養魚池であるから緋鯉や金魚はいない。トイレが池の上に張り出しており、人糞がナマズの餌になる。全ては利用サイクルの循環型でゴミが出ない。

屋敷林であるプカランガンは自給自足のホーム・ガーデンである。食物のみならず、用材、燃料、飼料、薬剤も供給する一つの完結した世界である。プカランガンのように自給用の何でもかんでも植える〈多品種少量栽培〉は、プランテーション(→505)のように〈単品種大量栽培〉と対極点にある植生である。

商品経済の浸透に伴いプランテーション方式が効率的とされてきた。しかし特定の植物のためプランテーション方式は農業も使用することから土壌を荒廃させ、数回栽培の後には放棄され、無残な姿をさらしている。プランテーション方式は生態系から見て略奪生産であることが分かってきた。

一方、プカランガンという在来型の古い屋敷林は植物の生態から極めて安定している。土壌は肥料がなくても生産性を損なうことなく再生産を可能にする。

農作物や家畜の組み合わせで樹木を育てる農業と林業の共生システムとしてアグロ・フォレストリー²¹がいわゆるようになった。アグロ・フォレストリーそのものであるプカランガンは新たな観点から評価されるようになった。

²⁰プカランガンが存在するのはインドネシアでもジャワ島だけらしい。出所加納啓良『インドネシアを齧る』

²¹アグロ・フォレストリーは Agriculture(農業)と Forestry(林業)の合成語である。熱帯雨林の生態系の特徴である生物多様性にならって、なるべく多彩な生物の生育を組み合わせる考え方である。